



タッチ・ミー
(前篇)



別句通 <bekkutooru>

あらすじ

[あらすじ] 亀井拓也(かめいたくや)は私立名東(めいとう)大学法学部の2年生。彼は同じ学部の子塚真紀(いしづかまき)に片思いだった。そこで、学園祭の準備を名目に交際をもくろむが、ニベもなくふられてしまう。そんな真紀には密かに片思いの相手があった。相手はなんと拓也の実兄で警察官の洋輔(ようすけ)だった。そんな事実は露も知らない真紀の思いは募る一方だった。ある日洋輔は帰宅途中で帽子を落としてしまう。偶然それを見かけた真紀は帽子を渡そうと洋輔を追いかける。たどりついた洋輔の自宅は二世帯住宅だった。ところが真紀は表札を見落としてしまい、祖父の『野口』姓を洋輔の苗字だと思い込んでしまう。一方、在宅中だった拓也と母の喜子(よしこ)は、真紀の訪問を拓也のためだと思い込んでしまう。それ以後、拓也も真紀も思い違いが炸裂し、真紀は電話口の拓也を洋輔と勘違いして、ついにはデートの約束をしてしまう。拓也は真紀と会えると思っているのに真紀は洋輔に会えるとはしゃぎまくるのだった。デート当日、待ち合わせ場所で待つ真紀は近づいてくる拓也を見て、真実の待ち合わせの相手とも知らずに我が身を隠そうとする。そして真紀と拓也がいる待ち合わせ場所に洋輔も近づいていた。そんなとき平穏な日常を切り裂く犯罪者が出没し、正義感に燃える洋輔は追跡を始める。拓也もその状況に遭遇したため兄の加勢をし、無事逮捕に至った。その一部始終を見た真紀は洋輔のもとに走り寄るが、そこで拓也と洋輔が兄弟であること、拓也を洋輔だと勘違いして電話をし、デートの約束をしていたことに気づいた。失意で走り去る真紀を追いかけ、拓也は真紀に兄・洋輔への気持ちに礼を述べた。季節は変わり学園祭最終日を迎えていた。真紀はいつの間にかまっすぐな拓也の心に惹かれており、心憎い演出で愛を告げた。以上

人物

人物（イメージキャスト）注）人物名は敬称略・イメージは全て平成16年当時のものです。

- ・ 亀井(かめい) 拓也(たくや)(20)大学2年生（二宮和也）
- ・ 石塚(いしづか) 真紀(まき)(19)大学2年生（相武紗季）
- ・ 亀井 洋輔(ようすけ)(26)警察官（玉山鉄二）
- ・ 八代(やしろ) 喬(たかし)(26)警察官（劇団ひとり）
- ・ 亀井 喜子(よしこ)(53)主婦（藤田直子）
- ・ 原(はら) 小百合(さゆり)(24)OL（山口もえ）
- ・ 野口(のぐち) 均(ひとし)(78)喜子の父
- ・ 村田(むらた) 幸雄(ゆきお)(20)大学2年生
- ・ 河野(かわの) 絵里(えり)(20)大学2年生
- ・ 中村(なかむら) 翔太(しょうた)(4)
- ・ 中村 弘(ひろし)(32)『楓』マスター ・ 浅井(36)犯罪者
- ・ 萩野(はぎの) (43)『はぎのフラワー』店長
- ・ 萩野の妻

○名東(めいとう)大学・全景

都市郊外の総合私立大学。

○同・大講堂の出入口扉脇（外側）

ニット帽をかぶった亀井拓也(21)と村田幸雄(ゆきお)(21)と河野(かわの)絵里(21)がいる。

村田「おい。石塚さんいつもの通り、残ってノートの清書してるぜ」

絵里「がんばって拓也君」拓也「う、うん。行ってくる」

拓也は中に入る。

残った村田たちは携帯端末のレンズ内に拓也を写し出す。

○同・大講堂・内部

中には石塚真紀(20)のほかは学生の姿はまばらである。

拓也が座っている真紀に歩み寄る。

○同・大講堂の出入口扉脇（外側）

村田と絵里が見守る。

村田「カメタク、ついに戦闘開始」絵里「拓也君と真紀、何話してんのかなー」

村田は携帯端末のシャッターを切る。

○同・大講堂・内部

拓也はこわばって真紀の前に立つ。

拓也「石塚さん、学園祭でゼミの発表会やるじゃん。打ち合わせとかしとかないー？」

真紀は拓也を見上げる。

席には『民法講義Ⅰ』などと標記されたテキストやキャラクターのノートなどが並び、真紀はそれを片づける。

真紀「学祭はまだだいぶ先じゃないですか？」

拓也「今のうちに発表会の役割分担を決めたいと思うんだ」

真紀は携帯端末を手際よく開き、確認を済ませるとすぐ閉じた。

真紀「少しならいいですよ」

大きな窓から陽射しが差し込む。

○同・大講堂の出入口扉脇（外側）

村田と絵里は気もそぞろ。

絵里「ねえ、見て見て、真紀も立ち上がった」

村田「どうやら石塚さんOKしたみたい」

拓也と真紀は出て行こうとする。

拓也は村田たちのほうへ微笑む。

○同・大講堂の出入口扉脇（外側）

村田は写した写真画像とともに携帯から拓也へメールを送信する。

○学園通り

通り沿いは商店街となっている。

○喫茶レストラン『楓』・全景

こじんまりとした洋食店。

○同店内

拓也が真紀に先立ちドアを開ける。

店内はカウンターとテーブル数席。

カウンター内では中村弘(32)が一人で全て取り仕切っている。

中村翔太(しょうた)(4)が、おもちゃのビーム銃を持って一人で遊んでいる。

拓也と真紀が片隅の席に着席する。

その席は、床までたれてある白くて厚いテーブルクロスがかけられている。

拓也はニット帽を脱ぎ、真紀の顔を見つめて言う。

拓也「ここの店わりかしおいしいんだよ」

真紀「そうなんですか」

真紀はすぐに窓外の光景に目をやる。

中村「ご注文は？」

拓也「あ、ぼくエビピラフ。石塚さんは」

真紀「わたし、ミルクティーで」

拓也「あれ？おなか空いてないの？」

真紀「今日ちょっと食欲無いんで」

真紀は両肘をついてぼんやりと店内のほうに視線を送る。

拓也は携帯端末を確認する。

拓也「あ、ちょっと失礼」

拓也は席を立ち上がる。

○同・手洗室に至る細い通路

拓也が歩いている。

拓也「ふう。なんかちょっと強引だったかな」

拓也は少し苛立っている。

行く手に翔太がいて、おもちゃのビーム銃をかまえて拓也にたちはだかる。

拓也「おい、どけよ」

翔太に対し手で振り払う仕草をする。

翔太は不機嫌そうな顔になる。

拓也がドアを開けて手洗室に入る。

翔太は銃を化粧室のドアに向ける。

翔太「ばきゅーん！」

○同手洗室内洗面台

拓也が携帯のメールを確認している。

[カメタクへ 石塚さんどう？成功を祈る！（^^） from村田]

拓也「はいはい。わかってまっさ」

拓也は返信メールを打つ。

○同店内

真紀が席で文庫本を読んでいる。

翔太が姿勢を低くしながらビーム銃を持って、真紀たちの席に近づいてくる。

翔太はクロスの下をひょいとまくし上げてテーブルの下に入り込む。

○同テーブルの下

クロスがかけられて、外は見えない。

翔太が身をかがめている。

クロスの下で真紀のストッキングの両足が伸びている。

脱がし気味にした両の靴は踵(かかと)で少し踏まれている。

足音が近づいてくる。

真紀の座っていないほうの椅子がごとごとと引かれる。

ジーンズをはいた二本の足がクロスの中に侵入してくる。

翔太が二組の足を見比べる。

翔太の頭上のテーブル板にことり、とグラスを置いたような音がする。

拓也の声「石塚さん、携帯の番号とか聞いてもいい？これぼくの番号です」

○同店内・拓也と真紀の席

拓也は携帯番号の書かれたメモを真紀に渡そうとする。

真紀はそれを見つめる。

真紀「とりあえず必要は無いと思いますけど」

拓也「そ、そうですね」

拓也ががっかりした表情をする。

真紀「準備は私と亀井君だけでやらなきゃいけないんですか？」

真紀が冷たい眼差しで視線を返す。

拓也「いえ、とりあえず二人で準備の準備を始めておこうと言うことで」

真紀「準備の準備？」

拓也「互いに住まいも遠くないじゃない？」

○同テーブルの下

翔太がビーム銃で真紀のストッキングの足をなでる。

○同店内・拓也と真紀の席

真紀は一瞬、目線が一点に張り付く。

真紀が無表情で拓也を睨み返す。

拓也「都合いいと思うけどなあ」

真紀はうつむき、無言でティーカップをすする。

○同テーブルの下

翔太が拓也のジーンズすそ下の足をなでる。

○同店内・拓也と真紀の席

拓也は鼻孔が広がり目が天井を向く。

真紀は憤慨した目つきでうつむく。

拓也M(モノローグ)「足で触ってくるなんて、けっこう大胆だな。それなのに恥じらってる」

拓也(とりすましたように)「だから、とりあえず二人で進行させようよ」

○同テーブルの下

翔太が真紀の足をなでる。

○同店内・拓也と真紀の席

真紀の眉間はゆがみつつある。

拓也には真紀の顔がうっとりしてるように見えている。

拓也M「かわいいー恥ずかしがっちゃって」

○同テーブルの下

翔太が拓也の足をさわった後、真紀の足をさわる。

○同店内・拓也と真紀の席

真紀はついに憤怒の目になっている。拓也には相変わらず真紀が自分に熱い

拓也M「おお！こ、これは絶対、本気だ！」

眼差しをむけているように見えてる。

○同テーブルの下

拓也は靴を脱ぎ自分の片足を伸ばして真紀の足をさわりにかかる。

翔太は体をのけぞらせる。

○同店内・拓也と真紀の席

拓也は頬が紅潮し焦点のぼけた目で真紀を見る。

真紀は目を見開き顎を堅くしぼる。

拓也「真紀ちゃん。どうかな。ついでに僕たちつきあわ……」

真紀は両手でテーブルをどんと叩く。

他の客が振り返る。

真紀「もう、やめて下さい！けがらわしい！！」

真紀が立ち上がる。

拓也が不思議そうな顔になる。

拓也「だって、真紀ちゃんのほうから先に」

真紀「なな、なんのこと？帰ります！」

真紀はバッグをつかみとって足早に出口のほうへ向かう。

拓也は後を追う。

拓也「待ってください～。石塚さんー」

真紀は立ち止まり拓也を振り返る。

真紀「私、好きな人いますから！」

真紀は店から出て行く。

拓也はレジ付近で立ち止まったまま、うなだれてしまう。

店主はいぶかしげに拓也を一瞥する。

拓也「はあ……なんなんだよ……まったく！」

拓也はかばんとニット帽を席に取りに戻ってから、支払いをすませ店を出る。

翔太がテーブル席の下から這い出る。

○『北町』交差点

角には一軒の交番がある。

拓也が歩いて来てその交番に入る。

○『北町交番』内部

デスクに座っていた警官の制服を着た八代喬(26)が顔を上げる。

八代「拓也じゃないか。おーい、洋輔〜！」

奥から警官の制服姿の亀井洋輔(26)が出てくる。

拓也は、ニット帽を脱ぎ机の端に置き、かばんも机に置く。

拓也がうつむき気味に來客席に座る。

洋輔「なんだよ〜。勤務中は亀井巡査と呼べって……あ、拓也じゃねえか」

拓也「ちは〜」

洋輔「勤務中に來るなっていったろ。おれとこいつだけだからいいよなもの」

八代は苦笑する。

八代「家近いとしょうがないよな。拓也」

拓也「ごめんなさーい」

洋輔「なんだ。またなんかあったのか〜」

洋輔は八代に目配せしつつ、拓也とともに表に出る。

かばんをあげるとききニット帽が机から床にずり落ちる。

○同外

拓也と洋輔が出てくる。

拓也「さっき思いきしフラれちまったよ」

洋輔「そんなことかよ。もう少しで仕事終わるから、家で聞いてやる」

とぼとぼ帰り出す拓也を見送る洋輔。

八代が表に出てくる。

八代「拓也なんだって？」

洋輔「ああ、ゴメン。まったくいつまでたってもガキなんだよ。あいつ」

八代「この兄にしてあの弟あり、か？」

洋輔「おっ言ってくれた。こいつ」

八代「こいつじゃなくて、八代巡査」

洋輔と八代は笑って中に入る。

○『北町』交差点

真紀が現れ、いそいそと北町交番に歩みを向ける。

○『北町交番』前

洋輔が立っている。

真紀が近づいて来て、はにんかんだ表情で会釈をする。

洋輔が微笑んで会釈する。

真紀「この前はありがとうございました」

洋輔「その後変わったことはないですか」

真紀「はい」

真紀は顔を赤らめ、立ち去る。

真紀が少し離れたところで遠い眼差しで洋輔を振りかえる。

洋輔は交番の中に入ってしまう。

真紀「変わったことは……あります」

○同内部

洋輔が入ってくる。

八代が巡回簿のチェックをしながらちょっとだけ真紀を目で追っている。

八代「なんだい。今の子？」

洋輔「二週間前、あの子が路上で男にからまれてたとき、たまたま俺が通りかかって難を逃れたんだよ」

洋輔は苦笑する。

八代「ふうーん」

× × ×

洋輔が壁の時計を見る。

洋輔「じゃあ、後はよろしく」

八代「おい、待てよ」

八代は拓也の座った椅子の下に落ちていたニット帽を拾い上げる。

八代「これ拓也の？」

洋輔にそれを渡す。

洋輔「あ、そうだ。あいつのだよ。あーあ交番で落とし物するかね」

八代「でもよかったじゃん。お前がいて」

○路上（夕）

私服の洋輔がオートバイを運転している。

上着のポケットに拓也のニット帽をつっこんでいるが、はみ出しつつある。

○別の路上（夕）

『はぎのフラワー』のスマートなロゴ入りボディ軽ワゴンが走る。

○軽ワゴン車内

不機嫌そうな顔の真紀が同店のロゴ入りエプロンを着用し、運転している。

後部荷台にはブーケや鉢植えがある。

真紀M「まったく亀井(拓也)の奴、ふざけないでよ。もう！」

○『西町』交差点（夕）

信号が赤になり、軽ワゴンが停車する。

対向車線には洋輔の乗ったオートバイがやってきて右折のウインカーを出して停まる。

○軽ワゴン車内

真紀は洋輔の顔を見てはっ、とする。

真紀「あ、あの人は、私のおまわりさん?!」

真紀は洋輔の顔を見つめ続ける。

○『西町』交差点（夕）

洋輔のほうは真紀に気づいていない。

信号が青に変わる。

洋輔のオートバイが少し前進する。

真紀は後の車からクラクションを鳴らされてしまう。

真紀は我に返り、パッシングをする。

洋輔は頭を下げ右折に入ろうとする。その時真紀と目が合う。

真紀は思わず目をそらしてしまう。

真紀は洋輔が曲がる方の道に入ったとき上着のポケットから何かが落ちるのを見てしまう。

真紀「あ、なんか落とした！」

真紀はすぐさま車を道路脇に止め、落とし物の確認のために降りる。

歩道脇に落ちたのは拓也のニット帽。

真紀「ん?どっかで見たような？」

真紀がニット帽を拾い上げおそろおそろ匂いをかぐ。

真紀は頬を薄く染めて、洋輔が走っていった道を見る。

少し先の別の赤信号で洋輔が停まっている。

真紀「は！」

真紀は車に乗り込み洋輔の後を追う。

○軽ワゴン車内

先の信号は青に変わってしまい洋輔は走り出す。

真紀「ああ～待ってー」

真紀はクラクションを鳴らすが洋輔は気づいてくれない。

○路上（夕）

洋輔はさらに別の道に曲がっていく。

真紀は追いつけその道を曲がる。

真紀M「なんかストーカーみたいだなー。でも落とし物届けようとしてるだけだし」

真紀はハンドルを握りしめる。

○亀井家・全景（夕）

行き止まり道路に面した二世帯住宅。

庭は植木が生い茂っている。

庭には洋輔のバイクが停まっている。

○同・浴室内

拓也が入浴中。

○同・浴室前

浴室の扉の前に洋輔が立つ。

洋輔「拓也、ただいまー」

拓也の声「あ、兄貴、おかえり」

洋輔「話は後だな？俺寝るわ」

拓也の声「うん。ありがと」

洋輔はあくびをしながら出て行く。

拓也の声「あ！そうだ、兄貴、俺のニット帽交番に無かった？兄貴ー?!」

○同・洋輔の部屋

眠そうな洋輔が服を着替えている。

洋輔「あれ？なんか忘れてるような。いいか」

○亀井家・前（夕）

真紀の軽ワゴンが門の前で停まる。

真紀がニット帽を持って降りてくる。

真紀M「この先は行き止まりだから、あの人の家はこのへんのはず……」

真紀はそわそわして周囲を見回す。

真紀「あ、あのバイク！」

真紀が洋輔の乗っていたオートバイを見つける。

真紀が門扉の表札を見る。真紀M「名前は野口さんか……実家よね」

真紀はニット帽を握りしめて玄関へ向かっていく。

○同門扉の表札のアップ（夕）

つたが生い茂り門扉の大半を覆い尽くしている。

『野口』の右隣に『亀井』の表札が少し隠れ気味になっている。

○同玄関ドア前

真紀がドア横のインタホンを押す。

亀井喜子(53)の声「はい。どなた」

真紀「あの、ご家族の方が落とし物されたかと思うんですけど。これ」

真紀がインタホンのレンズ前にニット帽を掲げる。

○同内部二階・廊下

風呂上がりの拓也がまっばだかでうろついている。

拓也「あれえ？洗ったパンツがねえ！」

○同内部・台所

夕餉の支度中。

喜子がモニターの画像を見ている。

ニット帽を持つ真紀が写っている。

喜子M「あら、あれは拓也の帽子じゃないかしら」

○同玄関ドア前

真紀が立っている。

喜子の声「すみません。今開けます。待ってくださいね」

真紀「……はい」

真紀はうつむき加減になり畏まる。

○同内部二階・廊下

まっばだかの拓也が、階下で喜子が玄関に赴くのを見る。

拓也（母親へ）「ねえー……俺の!？」

拓也が言いかけるや否や、喜子が玄関ドアを開けている。

ドア外で真紀がニット帽を持って立っている。

拓也は焦って身を壁のかげに隠す。

拓也M「石塚さん、俺のニット帽どっかで拾って届けに来てくれたんだ。交番に忘れてたと思ったけど」

拓也がくしゃみをして、焦って身を壁のかげに隠す。

○同内部・玄関

くしゃみ音が二階から聞こえてくる。

喜子と真紀は二階のほうを振り向く。

喜子は愛想笑いをする。

喜子「ごめんなさい。あの子、今お風呂から出たばかりで」

真紀「いいんです。届けに来ただけなんですから。どうも失礼しました」

真紀は深く頭を下げ、玄関を出て行く。

取り急ぎ髪を整え、服を着た拓也が二階から大あわてで降りてくる。

拓也「石塚さ～ん」

喜子「あ、拓也。彼女帰っちゃったわよ」

拓也は焦りドアを開け、表へ駆け出す。

○同・玄関前（夜）

外はすっかり暗くなっている。

拓也は急ぎ足で路上に出してみる。

真紀の姿も軽ワゴン車も無い。

卓也の表情はゆるんでいる。

拓也「でもどうして俺の家わかったんだろ？ゼミの名簿かな？はっくしょん！」

街灯が路上を青白く照らしている。

○同内部・リビング

亀井家の食卓。

拓也、野口均(78)がソファにくつろぎテーブルを囲む。

喜子はカウンター向こうのキッチンで夕餉の支度をしている。

テーブルにはいくつかの総菜や食器類が並び野口はビールグラスを傾けテレビを見ている。

眠そうな顔でジャージ姿の洋輔が入ってくる。

洋輔は拓也の隣りに座り、耳打ちする。

洋輔「拓也、さっきの話の続き」

拓也「え？ああ、もういいよ」

洋輔「学生は気楽でいいな。俺なんか最近、実績あげられなくてさ」

拓也「街がそれだけ平和ってことじゃん」

喜子が料理を運んでくる。

喜子「さっき、拓也のガールフレンドが来てくれたのよ」

洋輔「え？ほんとかよ。彼女？」

拓也「ト、トーゼン」

拓也はすました顔でVサイン。

洋輔が拓也にビールを勧める。

拓也がうまそうにビールを飲む。

野口「その子今度家に連れて来たらどうだ」

拓也「う、うん。連れてくる」

満更でもなさげに答える。

洋輔「都合いいなら明日の冷田神宮の縁日に俺と小百合とでダブルデートしない？」

拓也「あ、ああ。できれば」

洋輔が後ろを振り返ると、スチール棚の上に拓也のニット帽が置かれているのを見る。

洋輔「あれ？」

喜子が大皿でメインの料理を運んできて、テーブルに置く。

喜子「さ。できたよ。食べましょう」

洋輔たちは料理に箸を伸ばす。全員「いただきます」

○『北町交番』全景

洋輔が表に立っている。

中には八代がいる。

紙袋を持って真紀がそこを訪れ、洋輔に会釈する。

洋輔が返礼する。

真紀「あの、こんにちは。先日はお世話になりました。石塚です」

洋輔「ああ。こんにちは」

真紀は洋輔に柔らかな眼差しを送る。

真紀「あの、一昨日はほんとにすみませんでした。その、突然、おじゃまして」

洋輔「ああ？気にしなくてもいいですよ」

真紀「失礼します！」

真紀は深く頭を下げて急ぎ足で交番を後にする。

八代が表に出てくる。

八代「おとついで来た子だろ？」

洋輔「ああ。でも、何度もあいさつに来るなんてキリないだろうに」

洋輔は苦笑する。

八代「お前に気があるんじゃないね？モテる男はつらいね」

洋輔「馬鹿言え」

洋輔は少し首をかしげる。

○路上（商店街）

真紀がうつむき加減に歩いている。

真紀「ああ、ダメだ。やっぱり渡せなかった」

真紀のバッグにはギフト用の紙袋が入っている。

真紀M「落とし物とはいえ家まで届けに行くなんて強引だったかなあ」

真紀は小さなビルの一階にある、花屋『はぎのフラワー』に入っていく。

○『はぎのフラワー』内部

色とりどりの花々が陳列。

真紀が店のエプロンを着用して商品となる花々を切り分けている。

真紀M「ああ、野口さん……」

真紀が思い浮かべた洋輔の警官姿。

店先から萩野（43）が現れる。

萩野「石塚さん、マリーゴールド入荷してきたから、お願いー」

真紀「あ、はい」

萩野「石塚さん、最近何かいいことあったでしょ？違う？」

真紀「いえ、そんな……」

真紀ははにかんで口ごもってしまう。

萩野「これで南町1の2の3の安中さんの家の場所調べておいて」

店主が使い込んだ地図帳を渡す。

家の一軒一軒が細かく載っている大きな住宅地図。

萩野「少し古い地図だけどたぶん載ってるよ」

真紀「はい」

真紀が椅子に座りページをめくる。

真紀「……安中、安中……。あった」

真紀は鉛筆でその家に○をつけた。

真紀M「そういえば昨日伺った野口さんの家もこの近くだったっけ」

（FB）（フラッシュバック・回想）真紀の運転で走る軽ワゴン。

真紀は地図で道をなぞり、野口（＝亀井）家の場所を見つける。

真紀M「あった！西町4の5の6か。なんかほんとに私ストーカーみたい……でも、これや

っぱりあの人に渡したい　　な……」

傍らのバッグに入っているギフト用の紙袋を見る。

店先で萩野と妻の会話が聞こえる。

萩野の声「おい、西町4丁目の野口さんそこへの配達まだだったっけ？」

妻の声「野口さん？たしかあの行き止まりの通りの？そういえばまだだね」

真紀M「西町4丁目？野口？行き止まり？」

○同・店先

販売用の花々が並んでいる。

萩野と妻がいる。

真紀が店内から出てくる。

真紀「すみません、私が行ってきます」

萩野「え？でももう終わりの時間でしょ」

真紀は腕時計を見るポーズをとる。

真紀「あ、大丈夫です。少しの時間なら」

○路上（亀井家の近く）

走る軽ワゴン。

○軽ワゴン車内

真紀が軽ワゴンを運転している。

荷室には『喜寿・野口均様』の揮毫のプレートがついたブーケ。

助手席には○のつけられた野口家（＝亀井家）の載った頁が開かれている住宅地図が置かれている。

真紀の鼓動が少し早まる。

○路上（亀井家の近く）

拓也が歩いている。

拓也「うー。頭いてえ、喉いてえ。風邪ひいちまった。昨日の湯冷めだな……」

○亀井家・玄関前

真紀はブーケとギフトの紙袋を抱えて玄関横のインタホンを押す。

真紀「すみませーん、『はぎのフラワー』です。お花をお届けに参りました」

ドアが開き喜子が応対に出る。

喜子「ご苦労様。あら！昨夜のお嬢さんじゃない？」

真紀は恥ずかしそうに上目遣いで喜子に会釈してブーケを渡す。

喜子「『はぎの』さんとここで働いてるのね」

真紀「一昨日は突然お訪ねして申し訳ありませんでした。これ渡して頂けませんか？」

真紀はギフトの紙袋を喜子に手渡す。

喜子「え？どうして？お礼をしなきゃいけないのはむしろこっちよ？」

真紀「とんでもないです。このあいだ、ものすごく助けて頂いたので……」

真紀の思い描く警官姿の洋輔。

紙袋を受け取った喜子は微笑む。

喜子「そうですか。まあ、あの子、喜ぶと思います。渡しておきますね」

喜子が思いうかべる拓也の姿。

真紀「お願いします！」

真紀は深々と頭を下げ、帰ろうとする。

喜子「あ、ちょっと待って。良かったらあの子に電話でもしてあげて下さいな。喜ぶわ」

真紀「え？……はい！！」

喜子「あの子の携帯番号教えるわね」

○路上（亀井家の近く）（夕）

真紀の軽ワゴンと歩いている拓也がすれ違うが互いに気づかない。

○軽ワゴン車内

頬をゆるませてにやけて運転している真紀。

真紀「ふふふ……やったー。お母様公認！」

○亀井家・玄関前（夕）

拓也が重い足取りで帰宅する。

拓也「うー。鼻にまできた。ぐすっぐすっ」

喉がだいぶやられて声も変わってしまっている。

ドアを開ける。

拓也「ただいまー」

○同内部・拓也の部屋

拓也が入室してベッドに倒れ込む。

デスクには真紀が渡した紙袋がある。

拓也「ん？なんだろ」

開けるとキャラクターものの携帯のストラップとメモが一枚入っている。

メモ「先日はありがとうございました。石塚真紀」

拓也「ま、真紀ちゃん」

電話が鳴り、受話器をとる。

拓也（はな声）「はいー」

真紀の声「あの一、私、石塚と申します」

拓也「え？石塚さん？あ、あ一、ぼくです」

真紀の声「こんにちは。夜分、突然お電話して申し訳ありません」

拓也「い、いえ、とんでもないです、あ、ストラップありがとうございます！」

○石塚家のあるマンション・全景

○同内部・真紀の部屋

小さめの洋室。

真紀は受話器を大事そうに抱えてる。

真紀「いいえ。それより先日突然お邪魔してしまいまして」

拓也の声「そんな。嬉しかったですよー」

真紀「あの、風邪ですか？全然声違いますね」

拓也の声「そうなんですよ。ちょっと無理しちゃって」

真紀が警官の洋輔を思い浮かべる。

○拓也の部屋

拓也が通話している。

真紀の声「無理なさらないでください」

拓也「あ、ありがとう」

拓也は少し目が潤む。

○真紀の部屋

真紀が通話中。

カールコードを指に巻き付けている。

真紀M「お見舞いに伺ってよろしいかしら？って言いたいな……」

○拓也の部屋

拓也が通話中。

眉を少ししかめて床を見つめている。

拓也M「見舞いにでも来てほしいな～とか言っちゃおうかな……」

○真紀の部屋と拓也の部屋（同時）

半分が真紀、もう半分が拓也。

真紀「お仕事大変ですよ？夜勤もあるし」

拓也「ええ、まあ。もちろん、ぼくは夜も出てくれって言われます」

同M「コンビニでバイトしてるの、なんで知ってるの……ま、いいか」

真紀「特に最近物騒ですもんねー」

拓也「その通り！こないだも別のところで深夜強盗があったみたいで、命がけです！」

真紀「落とし物届けにくる人も多いでしょ？」

拓也「落とし物？……そうなんですよ～そーゆーのけっこう煩わしくて。ただでさえメンドウな仕事ばかりなのに……」

二人とも再び一瞬の沈黙。

拓也・真紀（同時に）「今度お会いしましょう！」

○拓也の部屋

拓也が興奮した面持ちで通話する。

拓也「じゃあ明日の冷田神宮の縁日行きませんか？待ち合わせ場所は大鳥居でー」

真紀の声「でも、風邪は大丈夫なんですか？」

○真紀の部屋

真紀が通話している。

拓也の声「平気です！今夜一晩で治します！」

真紀「わかりました！念のため私の携帯の番号よろしいですか？」

拓也の声「はい！ここに出てるやつでしょね！」

○満月の夜空

○真紀の部屋と拓也の部屋（同時）

半分が真紀、もう半分が拓也。

二人はほぼ同時に受話器を置く。

拓也・真紀（同時）「やったー！」

○拓也の部屋

拓也は額を掌で押さえ床にもぐる。

拓也M「いかんいかん。早く治そう」

○真紀の部屋

真紀がクローゼットを開けて洋服を品定めしている。

真紀「何着てこっかな～。野口さーん」

真紀はクローゼットの扉裏の鏡に向かって敬礼する。

○亀井家内部・リビング

拓也が鼻をかみ、錠剤を飲む。

拓也は真紀からもらったストラップをつけた、携帯端末の画面に真紀の携帯番号を表示させてにやけている。洋輔が拓也のそばに座る。

洋輔「おい拓也、何をにやけてんだよ」

拓也「明日、冷田神宮で彼女と会うんだよ。これさっき教えてもらった携帯番号だぜ」

拓也が洋輔に画面を見せる。

洋輔「貸せよ。オレが電話してやるよ」

洋輔はふざけて拓也の携帯をひったくろうとする。

拓也「よせ。明日の楽しみにとっとくんだ」

拓也は真っ赤な顔でむきになる。

洋輔「なら、俺も明日、小百合と冷田神宮行くだろ。彼女、紹介してくれよ」

拓也「いいぜ～」

洋輔「でも風邪平気か？声すごいぞ」

拓也「平気平気。バググション！！」

拓也が鼻をかむ。

（後編に続く）

[シナリオ]タッチ・ミー（前篇）

<http://p.booklog.jp/book/76064>

著者：別句通〈bekkutooru〉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

*本作品の著作権はGK CIRCUIT LIMITEDが保有しております。

*本作品の2次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkccircuit.comか

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76064>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76064>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ